

清書千字文の漢字音

中村雅之

1. 北京語か官話か

小文では尤珍編「清書千字文」(康熙24年[1685])の満洲文字表記による漢字音の性格について検討する。「清書千字文」は「千字文」の発音を満洲文字で表記した資料であるが、満洲文字のみで漢字は併記されていない。ほかに漢字と満洲文字表記の双方を持つものとして沈啓亮編「満漢千字文」(康熙年間)が知られている。岸田文隆(1994a)は「清書千字文」と2種の「満漢千字文」のローマ字転写による対照表を提供しており、極めて有用である。本稿の記述もこれによる<sup>1</sup>。

17世紀末およびその前後の時期に、漢字音を満洲文字で表記する場合に拠るべき方言は、北京語か官話(いわゆる南京官話)のいずれかであったと考えるのが穏当であろう。以下のいくつかの例を見ただけでも、「満漢千字文」の表記が北京語に基づいていることは疑いの余地がないが、「清書千字文」が官話であるのか北京語文言音であるのかは即断できない。「清書千字文」と「満漢千字文」はそれぞれ「清書」「満漢」と略す。漢字の前の数字は岸田(1994)による整理番号)

	清書	満漢
0012 昃	je	jai
0305 学	hiyo	hiyoo
0321 楽	yo	yoo
0372 惻	ce	cai
0696 色	še	šai
0723 見	giyan	jiyan
0773 落	lo	lao (←mao)
0910 獲	hūwe	howai

これらの内、入声字に見られる「満漢千字文」の音形は北京語白話音であり、これらを南京官話音と見なすことは不可能である。また、ただ一例のみではあるが、「満漢千字文」で「見」が「jiyan」と記されていることは、17世紀に牙喉音声母が舌面音化していた北京語の状況を物語る。

一方、「清書千字文」の音形は、これだけでは南京官話音とも解釈できるし、北京語文言音とも解釈できる。官話における入声韻尾(声門閉鎖音)は満洲文字表記では捨象されるからである。しかし、以下のような蟹摂の音形を見ると、「満漢千字文」は北京語の韻母を反映するが、「清書千字文」は「階」を除けば北京語風ではない。

	清書	満漢
0063 芥	giya	giye (←hiye)

<sup>1</sup> 岸田氏の用いた資料は以下の通り。「清書千字文」は内閣文庫所蔵の『千字文註』所収本、「満漢千字文」はヴェチカン図書館所蔵本とパリ国民図書館所蔵本の2種。「満漢千字文」の2種のテキストはほぼ同内容であるため、ここでは区別しない。なお、明らかな誤記は本来意図された音形を提示し、元の綴りは括弧に示した。例えば、lao (←mao) とあるのは mao が誤記で lao を意図していることを表す。

0458 階	giyei	giye (←giyen)
0708 誠	giya	giye
0725 解	giya	giye
0934 皆	giyai	giyei

19 世紀の証言ではあるが、エドキンス (Edkins 1857) は官話の -iai が北京語で -ie になると明言している。上の「皆」における状況はその反映と見られる。ただし、「芥」「誠」「解」は「清書千字文」で「giya」であり、「giyai」になっていない。これについては編者の尤珍が江南長洲の人であることを考慮すれば、吳方言の音形が入り込んだものと推測できる。

また、果摂 1 等の韻母は開合を区別せず、-o である。これも南京官話的な表記と言える。ただし、この表記は満漢千字文においても同様であり、唯一北京語的でない特徴になっている。

## 2. 清書千字文における北京語要素

上に見た「階」は北京語風の音形であるが、「清書千字文」には他にもいくつか北京語の音形と見なし得る表記が見られる。

	清書	満漢
0538 宅	jai	jai
0587 約	yoo	yoo
0902 躍	yoo	yoo
0907 賊	dzei	dzei
0955 懸	siowan	hiuwan

満洲文字表記では「-oo」「-iyoo」は一般に[-au][ -iau]を意図したものである。したがって、「約 yoo」「躍 yoo」は北京語白話音の音形であり、「宅 jai」「賊 dzei」も北京語白話音の音形である。最後の「siowan」については事情がやや異なる。康熙帝玄燁の諱を避けて、漢字「玄」のみならず、その満洲文字表記「hiuwan」も忌避される傾向にある。その際、漢字では代替字として「元」が用いられることが多く、満洲文字表記では「siowan」と綴られることになっていた<sup>2</sup>。「玄」と同音の「懸」についても「hiuwan」が用いられないのはそのような事情による。代替表記として「siowan」が用いられること自体が、団音の舌面音化が進んでいた北京語を背景にするとはいえ、このような措置は半ば公的なものであるから、この例を所拠方言の判断材料にすることは適当ではない。したがって、「清書千字文」における北京語的な要素は「階 giyei」「宅 jai」「約 yoo」「躍 yoo」「賊 dzei」ということになる。

## 3. 清書千字文の漢字音の性格

清書千字文の表記の特徴をまとめれば、以下の通りである。

- ① 尖団の区別が明確である。
- ② 果摂 1 等の韻母が開合の区別なく、-o である。
- ③ 蟹摂の韻母が -iyai または -ia または -iyei である。(-iyai は官話の音形であるが、-ia は吳方

<sup>2</sup> cf. 岸田 (1994b, p.18)。

言的、-iyei は北京語的である。)

- ④ 入声韻は南京官話の音形と見なし得るものが支配的であるが、北京語白話音の音形が 4 例見える。

全体としては南京官話の音形が支配的である清書千字文の表記であるが、その中には蟹撰に見られる呉方言的な要素や、「階 giyei」「宅 jai」「約 yoo」「躍 yoo」「賊 dzei」などの北京語的な要素も垣間見られる。これらの非南京官話的な要素は全体から見れば例外的なものであるから、これをもって清書千字文の表記を北京語と断ずるのは無理がある。

官話はどの地域にあっても比較的均質な体系を持っていたが、部分的には非体系的な要素が含まれることもあった。古屋昭弘(1989)で紹介された「賓主問答私擬」(16 世紀末)では、全体としては官話の音形であるにもかかわらず「塔 tap」「鴨 iap」という広東語の要素が見えており、17 世紀に日本でまとめられた『黄檗清規』では、やはり官話の体系の中に「如(イ)、遺(ミ)、次(チュ)、勤(キユン)、幽(ヒーウ)」のような福州音が混じっている<sup>3</sup>。清書千字文における蟹撰の呉方言的な要素や北京語的な要素もそのようなものとして捉えるべきものであろう。

特に、北京語的要素については、清代には南方の文人といえども相当に北京語の影響を受けており、北方人との交流の中で個別の語彙ごとに自らの言語の中に入り込んできたものと考えられる。興味深いのは、「清書千字文」とほぼ同時期の『新刻清書全集』所収「満漢切要雑言」において、その漢字音(満洲文字表記)が全体として官話音(あるいは北京語文言音)的であるにもかかわらず、「肉 žeo」「賊 dzei」の 2 例のみ北京語白話音の音形が見えることである。特に「賊 dzei」が両書に見えるのは、この音形が南方にもある程度広まっていた表れと見てよいのであろう。

#### <参考文献>

有坂秀世(1938)「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』15-10.

岸田文隆(1994a)「パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」について(1)」『富山大学人文学部紀要』21.

岸田文隆(1994b)「満洲字による漢字音表記の規範化—満洲字千字文を資料として—」『言語学研究』13.

古屋昭弘(1989)「明代官話の一資料——リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」——」『東洋学報』70-3・4.

Edkins, J.(1857), *Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*. Shanghai.

<sup>3</sup> cf.有坂秀世(1938)。